別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　丸山康司

本論文は、環境問題を解決するための方法に関して社会科学の立場から論じたものである。筆者は、環境問題を捉える新しい枠組みとして人間と自然との多様で動的な関係性を構造化した「人間―自然系」モデルを提示し、それを「ニホンザル問題」の事例に適用することによって、モデルの有効性を検証しようと試みている。

筆者の問題意識を支えているのは、これまで環境問題の多くが開発か自然保護かという二者択一問題として捉えられてきたために、真の解決が見出されるに至っていない、という現状認識である。筆者は、開発を規制するという手法で自然保護を強化しても、改めて人間と自然との望ましい関係を構築する努力がなされなければ両者の関係は疎遠となり、環境問題を解決する道からかえって遠ざかることになりかねない、と考える。そこで筆者は、まず二者択一的な問題の設定がそもそも何故成立したのか、そして、そのような問題枠組みが何故一般化したのか、その結果、環境問題の解決に当たってどのような困難が生じるに至ったのかという一連の問題群を、環境史の批判的検討を通して俯瞰する。その上で、人間と自然との多様で動的な関係性を再構築するための条件を示し、「ニホンザル問題」の事例を用いてそれを具体的に説明する。

本論文は８章から構成されており、序章で一般的な問題を提起した後、第２章と第３章において、問題を解くための分析枠組みとして人間―自然系の導出およびその基本的説明がなされる。第４章から第７章にかけては、「ニホンザル問題」を、「開発か自然保護か」の二項対立図式から解放し、人間―自然系モデルの中に位置づけることで具体的分析を試みている。第８章では分析結果の理論的意味を総括している。各章の具体的な内容は以下のとおりである。

序章では、社会通念としての「自然保護」概念の中に「人間対自然」という二項対立関係が埋め込まれており、人の手の加わらない「原生自然」が前提されているために、現実の自然と「自然保護」概念においてモデル化された「自然」との間にズレが生じ、モデルに該当しない自然が保護の対象から排除されることによって問題がより深刻化することを指摘する。有害鳥獣問題はまさにそのような問題として存在し、その真の解決を図るためには「人間対自然」の対立図式を超えなければならないと主張する。

第２章では、「人間対自然」の対立図式が伝統社会の中で徐々に形成され近代社会に至って一般化するに至る過程について、環境史の批判的分析を通して明らかにしている。ここでは、伝統社会と近代社会とを対比させて後者を批判し前者を再評価する方法によっては上述の対立図式を克服することができないことを指摘する一方、人間と自然との関係を構造的に捉えた上でその構造が変化する過程を動的に捉えることによって、人間と自然との間の多様な関係性を明示的に取り出して分析することが可能になることが示唆される。

第 3 章では、人間と自然との間の多様で動的な関係性を分析可能な対象として捉えるための枠組みとして、人間―自然系モデルが導出される。まず、人間概念および自然概念を抽象的レベルではなく具体的レベルにおいて捉えるために、地域主義、生活環境主義、生命地域主義の考え方が紹介され、それらを参照することによって、人間と自然との関係が多様なかかわり方の網目の中で構造化されることを示す。その上で、鬼頭秀一の「社会的リンク論」およびリチャード・ノーガードの「共進化」モデルを組み合わせることによって、人間―自然系の全体構造の動態的変化を分析することが可能になるとしている。具体的には、価値、知識、環境、技術、制度の各項目間の相互作用を通して構造化されたシステムが、それらの相互作用の不断の進行とともに動的に変化していくことを、記述することが可能になるというのである。ただし、ノーガードの「共進化」モデルにおいては価値が単一のカテゴリーにとどまっていたのに対し、筆者はそれを文化的価値と経済的価値に区分することによって、より現実に対して適用度の高いモデルに修正している。

第 4 章では、「自然保護」が対象とする「原生的な自然」概念が成立する歴史的過程を叙述し、その過程で価値、知識、環境、制度、技術それぞれの間の相互関係の断片化が進行し、その結果、「好ましい自然」と「好ましくない自然」の価値区分が固定化するに至り、自然をトータルに把握することが困難になったことを指摘する。両義的な価値を持つニホンザルはまさにこのような断片化した構造においては理解不可能な存在となる。そこで、あらためて人間とニホンザルとを人間―自然系の枠組みの中に置くことで、独自の構造を持った「ニホンザル問題」が描き出され、問題解決への糸口が開かれると説く。

第 5 章では、ニホンザル問題を実際に描写するために必要な背景の説明が行われる。まず、ニホンザルの生息する中山間地域における人間と森林とのかかわりの変化を記述し、生産過程を含んだ多様な関係性が薄れて次第に保護の対象として森林を捉える断片化した関係性が展開される様子が説明される。そのような過程において注目に値するのが鳥獣保護法の存在である。筆者は同保護法にもとづく制度の多様性が関係の多様性を反映していたことを強調する。そして、それとは対照的に、公園制度や天然記念物制度が自然を特定の文化的、経済的利益の対象として断片化し、規制という限られた方法によって人間と自然との関係性を単純化するものであると指摘する。

第 6 章では、人間とニホンザルとの関係が、独特の構造を持った「ニホンザル問題」として現れる過程を、動物園および野猿公苑制度の成立史を通して概観する。ここで筆者は、文化的価値、経済的価値、制度、技術、環境、知識の各要素からなる人間―自然系モデルをニホンザルの場合に即して具体化し、サルをめぐる人間―自然系の構造の変化を、１３世紀から１９世紀までと、１９世紀後半から２０世紀前半まで、および２０世紀後半以降の３段階に分けて説明し、最終段階において「原生的自然」に対応する観念的な「サル観」が出現することを確認する。

第７章では、「ニホンザル問題」のケーススタディとして青森県脇野沢村における「北限のサル」の事例が取り上げられる。筆者は、過去４０年間にわたる脇野沢村の住人とニホンザルとのかかわりにおいて、住人がサルの両義的価値を生産と生活の現場においてトータルに受け止め、緊張感を保ちながら共存する方向でサルとの関係を構築してきた事実を紹介し、その理由を人間―自然系

における各構成要素の内容の豊かさと、各要素間の関係の複雑さに求めている。筆者は、そこに、断片化され固定化されようとしていた関係性が次第に相互に結び合い、ふたたびトータルな人間―自然系として継続的に変化を重ねていく可能性を見いだそうとする。

第８章では、脇野沢村の事例において人間―自然系を構成する諸要素が断片的関係を超えて相互的関係を獲得するに至っていることを再確認し、そこから、価値、制度、技術、環境、知識の各要素の間の関係が断片化しているところに環境問題の本質があるという結論を導き出す。そして、問題の解決を図るためには、それらの要素の間に相互的な関係を作り出すことが必要不可欠であるとして、個々の環境対策や施策についても、それらが人間―自然系において多様で多元的で動的な関係性を築きうるものかどうかという観点から評価すべきであると論じ、全体を締めくくっている。

本論文の独創的な点は第一に、人間と自然との関係について、人間―自然系モデルを提示することによって、人間対自然という二項対立図式とはまったく異なる相互依存的な関係性、しかも動的に変化する関係性を分析可能な概念として明示化したことである。先行研究としては、第 3 章で取り上げた鬼頭秀一の「社会的リンク論」とノーガードの環境と社会に関する「共進化論」がある。

「社会的リンク論」は、自然と人間との間の断片化された関係性と相互に結ばれた関係性をそれぞれ「切り身の関係」「生身の関係」と命名することによって対比させ、両者の質的な相違を明らかにしたのであるが、本論文は基本的にこの対比の図式を継承している。しかし、「社会的リンク論」の対比の仕方は比較静学的であり、一方の関係性から他方の関係性への移行過程を動的に説明するものではなかった。本論文の筆者は、「社会的リンク論」にしたがって、環境問題の本質を「切り身の関係」に求めており、問題の解決のためには「生身の関係」を構築することが必要と認めるのであるが、「社会的リンク論」では前者から後者への移行の具体的過程を明らかにすることができないとして、環境と社会に関する「共進化論」に突破口を見出すことになった。

環境と社会に関する「共進化論」においては、人間の生活が生態系の一部に組み込まれたモデルが提示され、価値、組織、技術、環境、知識の各要素の間の相互関係の総体として表現されている。本論文の筆者は、組織をもう少し広く制度一般と読み替えて全体に幅を持たせた上で、各要素間の関係の変化が環境と社会からなる総体システムの共進化を引き起こすと捉えた。その上で、ノーガードが価値カテゴリーを価値一般としていたのに対し、筆者は文化的価値と経済的価値との間の相互作用がシステム全体の共進化過程に影響を与えるとして、文化的価値、経済的価値、制度、技術、環境、知識の 6 つの要素からなる人間―自然系を導出したのである。

本論文の独創性の第二点目は、筆者のオリジナルである人間―自然系モデルを用いて、現実の環境問題としての「ニホンザル問題」を分析したことである。筆者の分析枠組みによれば、環境問題は人間―自然系の諸要素間の関係が断片的であることによって生じるのであり、具体的には、自然が「好ましい自然」と「好ましくない自然」に二分され、前者が保護され後者が否定されることによって問題が構造化・固定化されることになる。筆者は、「有害鳥獣」と「天然記念物」という相対立する価値を併せ持つニホンザルという存在に焦点を絞る

ことで、問題の本質を先鋭化して抉り出すことに成功した。

本論文の学問的メリットは多岐に渡るが、とりわけ市場原理にもとづいた環境経済学の限界を明らかにする上で効力を発揮する。なぜなら、環境経済学は自然を希少価値のある資源として限定的に捉えるため、対象領域を拡張するためには絶えずモデルを高度化して自然の中に希少価値を発見する新たな方法を捜し求めなければならなくなる。このような方法では、モデルは無限に複雑化する一方、どこまでいっても人間と自然との関係が断片的であるということを自覚できない。また、個別事例の具体的記述に特化しているかに見える環境社会学に対しても、個々の事例の中に潜んでいる普遍的問題を明示化するための指針を提供している。さらには、環境政策や環境対策、環境運動のような実践に対しても、個別の政策や対策や運動を、断片化された関係性においてではなく、人間—自然系の総体的な関係性の中で正当に評価するための基準を示している。

以上のように、本論文は独創性、メリットの両面で高く評価することができる。しかしながら欠点もないわけではない。まず、「社会的リンク論」の批判ともかかわる問題であるが、筆者は異なる関係性を持った構造のあいだの動的な変化を強調するあまり、すべての構造のあいだに相対性、連続性を見出そうとし、その結果「社会的リンク論」において明らかであった「切り身の関係」を近代に固有の構造として特定し、近代社会の特殊歴史的な構造を浮き立たせる視点が後景に退いた感がある。とはいえ、この点に関しては筆者の動的な視点を突き詰める中から新たに問題を構成し直す契機を感じる部分もあるので、今後の展開に期待したい。

また、人間—自然系モデルの完成度に関しては、まだ十全とはいえない部分もある。（文化的、経済的）価値、制度、技術、環境、知識の各カテゴリーに含まれる具体的項目の選択がどの程度客観的に行えるか課題が残されている。さらに、動的な変化を重視すると言いながら、モデル上は諸項目を結ぶ線が共時的に表現されているため、現段階では諸関係の変化の起こる順序を明示することができない。今後、共進化の過程を具体的に明確にできるような形でより精緻化を図る必要があろう。

さらにまた次のような問題もある。筆者は「開発か自然保護か」という二項対立図式にとらわれたアプローチを批判することから出発するが、結果的には「開発」にも「自然保護」にもそれぞれの存在意義を認め、最終的にそれらを人間—自然系モデルの中に整合的に位置づけようと試みている。しかし、その手続きがやや不鮮明である。批判の対象をも包摂するようなより総合的な視点を提示したならばもっと説得性が増しただろう。

本論文には以上のような問題点が認められるが、それらはいずれも論文の学術的意義を否定するものではない。むしろ、環境社会科学という揺籃期にある学問が避けて通ることのできない問題群を余すところなく示しており、それらと正面から向き合いながら自らの論理を構築したという点で、本論文は環境社会科学の新しいページを開いた貴重な労作であると言える。したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。